この人に聞く　立石由美さん

人との出会いが私の学び

【略歴】
- 1948年生まれ
- 1970年京都府教員として採用。宇治市で勤務
- 1979年新潟市講師採用
- 1980年新潟県教員採用
- 2008年定年退職

編　集　部

小中高校で印象に残っていることは

私が舞鶴市立新舞鶴小学校に入学したとき、1年生は500人で10クラスでした。校区には、外地から子どもだけで引き揚げてきた子の施設、同和地区の子、一方で、比較的裕福な家の子、いろいろな出自の子がいた。入学して、すぐに教えられたことは、差別はいけない。みんな平等だということでした。とにかく、人と比較してはいけないということを学びました。

ところが、京都市立桃山中学校に入学すると、あの子はかわいい、あの子は勉強ができると、平気で言っていることにびっくりしました。

この中学校にも、遊郭だった歓楽街があり、暴力団が支配する地域もあった。当時、そういう地区の子は、どんなに頑張っても高校にいけない、就職もできないと悲観して結局、暴力団に入らざるを得ないことがあった。それで、どんな状態になるかというと、学校で暴れる。入ったと思ったガラスがすぐに割られる。冬、オーバーを着て授業を受けるのは当たり前だった。でも、この学校の先生たちのすごいところは、警察に捕まった子どもたちをもらい下げに行ったり、子どもの

相談にのったりなど、すばらしい取り組みをされていた。

高校は、桃山高校に入学しました。

当時、京都府は高校生春季討論集会、秋季討論集会があり、休日に希望者ですが、バスを仕立てて当番校に行き、分科会に分かれて討論する。定時制の生徒もいて、彼らが、労働者は云々、共産党宣言を読んで、云々ということ、わからないとも言えず、ぽかんとしていた。とにかく討論集会はすごかった。こういうことを先生方が応援してやってくれていたのです。修学旅行は佐世保で、基地のある地元の高校生と交流する機会を設けてくれた。

教職についてからわかったことですが、同和地区の子を就職させる完全就職の闘いをやった先生方ががっちりいたのでした。

振り返ると、小中高とすばらしい先生方の姿を見ていたことに気づかされます。

音楽教育の会との出会い

京都教育大学の音楽科に入学して、部落研に入りました。竹田の地区にいって子ども会をやったり、学生運動の仲間といろいろ活動をしました。それが、めちゃくちゃ楽しかった。その分、音楽のほうはおろそかになってしまいました。

3年生の時、先輩から音楽教育の会に入らないかと誘われました。行ってみると、目がパッとひらかれました。これは私が求めてたやり方じゃないかなと思ったことにであったのです。

こういう歌を歌ったら教えられる。教えたいなと思いました。その頃、私と同じ学科を出た人達が大阪にたくさん就職されていて、大阪音楽教育の会を作って活動されていました。その人たちは、ものすごく戦闘的でした。例えば、一クラスの中の半分以上が朝鮮籍という人たちの学校があった。「この子たちに、こんな花鳥風月とか、そんなものを教えられるか」ということで、日教組教研でもけんかを売っていました。それこそ沖縄を返せとか、うたごえ運動の歌の中で、その人たちが教材になるという歌を選んでやっていました。

そして授業含みの研究会を各学校で開催し、学校をはしごするような形で計画して、当時やっていました。そして、丸山亜季さんや林光さんとかが来て指導して

くれる。早乙女勝元さんを呼んで学習する。そんなことを、サークルでやっていたのです。

その授業を見に行ったら若い時の丸山亜季さんがいました。その授業は本当にびっくりしました。中学生が胸を張って歌っている。一人でも歌うし、本当に輝くような、本当に人間らしい顔して歌っているのです。そんな授業に出会ったのです。しかもその曲が、島小で歌われた歌でした。こんないい歌があるのか。これこそ私が求めていると歌だと思いました。

私も綺麗事みたいな歌は自分自身がそんなに歌いたくなかったし、いい曲だとは思っていませんでした。これを求めてたんだよなと思いました。

全教ゼミの、音学科の学習会で「日本のこどもの歌」っていう山住正己さんの新書を使って、子どもの歌の変遷を勉強したこともあり、やっぱりそよ風が入ってきてみたいな、そんな歌じゃ、本当に子どものものにならないと思いました。

じゃあ何を歌うんだろうと思った時に、本当にであったと思います。まだ学生でしたが、そういう先生たちの会にはできるだけ行くようにし、大会にも参加しました。四年生の時に秋田のわらび座にも行きました。

群馬の先生方から学ぶ

そのころ、男女同一賃金で女性が働き続けられる職業は限られていたし、育休がなく中途退職した母に会いにくる子たちの姿を見て、教員も悪くないかなと思いました。

教員になったさい、母から言われたことは、「嘘を教えてはいけないよ」でした。母は、軍国少女で絶対日本は負けないと教え続けていたのに8月15日に負けた、その時、本当にすごい衝撃を受けていました。

京都府教員として採用され、宇治市の小学校に勤め始めました。「先生」「先生」と呼ばれるだけで、私の大学は教育実習なんて、そんなことしなくても良いっていう風な雰囲気の学校だったので、まったく何もかにも知らず、どうしていいかわからない状態でした。

でも、教科書や指導書はどうしても納得いかない。で、どうしたかというと、手あたり次第、数教協、科教協、仮説研、などの民間教育団体に参加しました。私だけでなく、同僚の若い先生方も日作など、手あたり次第参加していました。

そのとき出会ったのが、群馬の先生方で、島小にい

らした船戸咲子先生でした。咲子先生の子どもたちの絵、この実践はすごかったです。ほんとうにどうしたら、こんな実践ができるのだろうかと思いました。咲子先生が音楽の先生でないのに、音楽教育の会にいらしてすごい実践を報告していました。斎藤公子さんもいらしていて、絵や生活、リズムなんかも教えてくださっていたころでした。

群馬の先生方は、島小の流れの方がいてすごかった。とにかく、群馬詣でをし、群馬の先生方から多くのことを学びました。でも、頭の中ではわかっていても、実践となると、なかなか難しかったです。

また、赤坂里子先生の国語の授業を見ました。子どもたちがいくらでもしゃべる。里子先生は、うんうんと言っているだけなのです。子どもたちはいくらでも討議をする。それを見て、呆然としました。どうしたらこんなことができるのだろうかと。すごい憧れでした。結局、退職までそんな授業はできませんでした。

虫を飼うこと、種を植えることを知る

根岸小学校に勤めていた時、私にいろんなことを教えてくれた先生がいました。

一番大きかったことは、虫を飼うことや種を植えることなど自然のものを教えてくれました。私は、本当にそんなことは全く知りませんでした。

あるとき、ジャコウアゲハのさなぎをくださって、羽化させることを教えてもらいました。子どもが持ってくる人参の葉についているアゲハの卵の飼い方も教えてくれました。給食に出た夏ミカンの種を植えると木になるよと言われ、子どもたちとやったら本当に木になりました。

アゲハがきて、卵をうむ。そして成長する。このことを教えてくれて、本当に恩人だと思っています。また、「アヒルを飼うのは面白いんだよ」と言って、動物を飼うことも教えてもらいました。絵や版画も教えてもらいましたが、何より虫を飼うことや種を植えることを教えてもらったことは大きかったです。

これは出会いですよね。

反原発運動に取り組むきっかけは

京都で仮説研（仮説授業研究会）に行っている頃、何だかわからないけど、原発事故にあったらこうやって逃げましょうというパンフレットをもらいました。

自動車じゃなくて自転車で逃げなさい。着いたところでは、シャワーを浴びなさい。逃げるときはレインコートを着ていきなさいとか、書いてありました。当時は、こんなことがあるのかなぐらいに思っていました。

もっと前には第5福竜丸の事件がありました。あの時に、私たちはよく雨降った時に外に出て雨に当たると禿げるとかと言われたていたので、放射能とかストロンチウム90とかは知っていたし、怖いものだと思っていました。原爆のことも知っていました。

しかし、日本で初めて東海村で原子の火が灯ったとき、すごいいいことだと思いました。原発事故が起こったらどうなるか知っていたけど、事故が起きるなんて考えもしませんでした。

その後、チェルノブイリの事故が起こりました。ドイツにいたずっと付き合いがある方は、買い物のさいに、慣れないドイツ語で、食品に放射能は含まれいなか聞いて買っている。あるいは、子どもを砂場で遊ばせていないかなどと書いてきました。私は知っていました。チェルノブイリの事故が起こったらどうなるか。でも、チェルノブイリの事故なんて、あれはソ連の、なんか遅れた国の事故でしょう。遠くの遠くのこと。私は本当にその時に肝に銘じなかったのです。

大変なことが起こったと思ったけど、遠い遠いところの事故だった。アメリカのスリーマイル島の事故も遠いところのことだった。イラン・イラク戦争なんかで劣化ウラン弾が使われていても、それも遠いところの話だった。

だから3・11が起こったときにすごくショックでした。私は知ってたのに、今まで何もしてこなかった。しかも原発がいいものだと思ってなかったけど、何もしてこなかった。あんな事故になると思ってなかったし、事故が強烈に怖かったです。

私本当に自分は逃げようと思いました。うちのお父さんがえらいことになったから、マスクして生活するようにと言いました。きっと多くの人がマスクを買いに走ると思ったから、コンビニでマスクを買いに行きました。でも誰も何もしていない。そうした、もんじゅの地質調査に出向している息子から、道路が空いているうち鉄道が動いているうちに避難してこいという、電話がかかってきました。本当に避難しようと思ったが結局しませんでした。

日々伝えられる原発の悪くなる状況を見るたびに、

もうこれは、原発はやめるしかない。そのためにはなんでもやろうと決意しました。

その時の決意が今もあるかどうかと言われたら、ちょっと違うところもありますが、これは死ぬまでやるしかないです。

ものすごいショックだった。知っていたのに何もしなかったというのは。

今後の取り組みたいことは

退職の時、これから何ができるか考えた時、一人で子育てをするのはよくないなと思いました。それで、新婦人の親子リズムの手伝いをさせてもらうことにしました。最近は、行政も子育て支援の一環として、同様なことを行っているので、参加者は減っています。でも、参加している人たちを次につなげたいと思って、お母さんたちがやりたいと思うことをキャッチしては「それをやりましょう」といって行っています。お茶が堪能な元同僚の方を講師に、お茶会を開き、着物、料理に笹団子、子どもに科学をと知り合いにお願いしながら活動を続けていきたいです。

もう一つが、私の家は、私の代で絶えてしまいます。私の家の先祖は、キリシタン大名の有馬晴信の曽孫の有馬 清純が延岡、糸魚川、丸岡と移封されたのについてきました。家には家系伝説や系図が残っています。実は。母親の実家も、母親の妹の家も、今の代で途絶えてしまう。全部途絶えてしまうので、こんな人がいたということを書き残すことが必要だと思ってきました。若いころは、気にしなかったのに。時間がないけど、なんとか残したいと思っています。

インタビューを終えて

立石さんとのインタビューは、3時間近くでした。紹介できませんでしたが、新潟に来て、出会ったたくさんの子たちのとの豊かな関わりと子どもからの学びが語られました。

（文責　編集部・和澄利男）